

ソノ傘ヲサ、セテ出行ス、信長櫓上ヨリ望見テ、渠ニ陣中ニテ威武ヲ示セト命ゼシニ、早クモ此處ヨリ人目ヲ輝カセシトテ悦賞セシトゾ、

〔藤葉榮衰記〕中盛隆公○會高倉城攻落給事

角テ盛隆公安積高倉へ被向、御馬、朱傘、指物、大小金ノ鞆張、熨斗付ノ裝束、御鐵炮衆千人○同

シ出立ニテ、誠ニ以テ花車ナリ、

〔老人雜話〕上玄朔盛んに療治はやりて、方々招待す、その時は肩輿と云物なくて、大なる朱傘を指

掛させ、高木履にて杖をつき、何方へも歩行す、人々羨むことにて有しとぞ、

〔甲子夜話〕四十一或人途ニテ值タリ、迎云シハ、大家ノ奥方ト覺シク、輿ニ朱傘ナドサ、セシ後ニ

牽馬アリ、婦人ノ供ニ乘馬ヲ從ヘラレシハ、珍ト言キ、夫ユエソノ紋ナド尋タルガ、慥ニハセザレ

ドモ、牡丹ニヤト云タレバ、是レ仙臺侯ノ奥方ナリ、流石ノ家風ナリ、

〔大江俊矩記〕文化四年八月三十日己亥、朱傘張替出來持參、紙ハ國栖色ハ光明丹、極上之由、骨取

十年四月二日己亥、朱傘張替出來、大坂屋持參、轆轤二共仕替、小骨不殘取替

〔下學集〕下傘器財唐傘中略墨傘器財是也

〔古今要覽稿〕器財墨傘

墨傘の名は下學集にみえたるより、古くは未だ見あたらす、圓光大師行狀繪に、大宮内府實宗の

亭へ行かれし時、對面のあひだ、門外の屏に墨傘を立かけるたる圖見えたり、さて墨傘は雨傘に

のみ有ものとおもへりしに、弘法大師行狀繪に、日傘に墨傘を畫けり、これは印本故墨かすれて

見ゆれど、正しくすみ傘とみゆれば、下に圖を載す、○圖猶原本につきて糺すべき事なり、

〔御供故實〕一大かたびら裏打の時、墨笠の事、大名も御さ、せ候間敷候間、墨笠をも被持まじく候

歟、暮々裏打大かたびらの時は、すみがさ御さ、せ候まじく候、